



大阪府立北野高等学校図書館

第2号

2014. 6. 20 発行

北野で長く教鞭をとらせてもらっていると、この6月の教育実習の時期はちょっと楽しみでもあります。卒業生の立派に（失礼！）成長された姿を見て、喜びを感じると同時に、月日のたつのが如何に速いかを思い知らされます。さて今回はその実習生の方々の若い感性で、図書館にある書物を中心に推薦して頂きました。きっと実習生の皆さんも図書館に久しぶりに足を運んで、高校生の時の自分をしばし思い出されたのではないのでしょうか。

書名の後ろにある（9 1 3 / M 8 3 / 4）などという記号は図書館での請求番号です。

① **重力ピエロ** **伊坂幸太郎 著** （ 913 / I42 / 14 ）

みなさん、読書に何を求めていますか？現実逃避でしょうか、それとも知の探究でしょうか。私はもっぱら心の安らぎを求めて読書しています。そんな人におすすめなのが、伊坂幸太郎の作品です。彼の作品は、登場人物の生い立ちや生活の背景が暗いものや、不遇なものが多いです。にもかかわらず、とても明るくハートフルで、読み終えたときには非常に心が穏やかになっています。また、なんといっても彼の作品は言葉遣いや、登場人物のキャラクターが非常に魅力的です。ここでは、そんな彼の代表作である重力ピエロを紹介します。この作品は彼の代表作ともいえる作品で映画化もされています。冒頭の「春が二階から落ちてきた」にはものすごい衝撃を受けました。連続放火事件や謎の暗号、そして遺伝子という様々なものが結びついて、最後にはホンモノの家族の絆を感じられることでしょう。みなさんも、心の安らぎがほしいときには、伊坂幸太郎の作品を読んでみてはいかがでしょうか。

② **老人と海** **ヘミングウェイ・著、福田恆存・訳** （ 933 / H2 / 5 ）

昔、友人に勧められて読んだ一冊です。老いた漁師と巨大な魚との孤独な死闘を描いた有名な作品です。小説としては短く、単純なストーリーですが臨場感あふれる描写や孤独に闘う老人の姿に思わず引き込まれてしまいました。自分の誇り、生きがいを追い求めストイックに漁にこだわり続ける老人のような人は、現代では少ないかもしれません。漠然と人並みの生活、人並みの幸せ、人並みの人生を求める人が多いような気がします。もちろんそれには大きな価値がありますし、実際に手に入れるため

には大変な努力をしなければいけません。しかし一方で、不器用に自分の道を生きることの美しさもあります。この本はそれを思い出させてくれたように感じます。短い本ですが非常に記憶に残るインパクトのある小説です。いままで読書をしてこなかった人（かくいう僕もですが）にも読みやすい本だと思うので、是非一度読んでみてください。

③ 1) 自分を動かせ サミュエル・スマイルズ 著 渡部昇一 解説

この本は、19世紀にサミュエル・スマイルズ（イギリス）が書いた「Self-Help（自助論）」という本を、渡部昇一氏がやさしく解説している本です。スマイルズはこの本で、志さえあれば誰にも可能性が開かれていることを言っています。江戸幕府が、開港政策をとりだした時代、イギリスに派遣された中村正直がこの本を持ち帰り、後に「西国立志編」として、日本に紹介することとなります。閉塞感のある時代、志をたてて外に飛び出してみませんか。図書館の蔵書にはなかったのですが、とりあえずということであれば、福沢諭吉の「学問のすゝめ」「西洋事情」なども読んでみてください。

2) 祖国とは国語 藤原正彦 著

「祖国～」は小学校から英語教育が進められる中、著者が国語の大切さを説いておられることに、とても共感を覚えました。国語は、日本人が日本人であるというアイデンティティそのものであり、それなくしてはこの国は成り立っていないと言っています。後半の藤原家のエッセイも楽しいです。この本も図書館になかったのですが、文庫本ですので、購入することもできると思いますし、図書館を探すと、「世にも美しい日本語入門」（安野光雄・藤原正彦 ちくまプリマー新書）（810 / A2 / 1）という本がありました。さらっと読めます。

④ 告白 湊かなえ 著 (913 / M31 / 1)

一つの出来事を見ても人によって「真実」が異なる、ということがよくわかる本です。とても読みやすいですし、深く考えなくても楽しめます。ですが、上記のような視点で読むと、また異なった面白さがあると思います。近代になって、科学的な進歩により、そこに客観的な「真実」が在り、それが唯一の「真実」だと考えられてきました。しかし、「真実」だと言われているものには、必ず誰かの感情や思いが入ってい

ると、私は考えています。テレビのニュースで映し出されている映像も、あくまでテレビ局の人が捉え、編集したものです。大学では、今まで当然と思っていたことが本当にそうなのか問い直す機会をたくさん与えられると思います。今まで「真実」だと思っていたことが、ある権力に創られたものだと感じる人も出てくるかもしれません。この物語は、一連の出来事について、それぞれの人物が自分たちの主観を交えて語っています。主観より客観の方が、正確で大切だと思うかもしれません。ですが、それぞれの登場人物にとっては、その人の感じている主観的なものこそ、大切な「真実」なのです。

⑤ 座右の古典 鎌田浩毅 著 東洋経済新報社

京大の名物教授となった感のある、総合人間学部・火山学者の鎌田浩毅教授による名著案内。本来私がここで読むべき本を案内するのが筋なのだろうが、この本は通一遍の読書案内とは一味も二味も違う。東大卒の官僚研究者という超エリート街道から、「学問の伝道師という天職に巡り会えた」という現在の京大教授としての地位を得るまでに糧としてきた 50 の古典、そのエッセンスを凝縮した内容は、これだけで非常に示唆深いものである。長い時間を越えてふるいに掛けられてきた、人間と社会と学問に関する磨き上げられた真理に目を向けることが、変化に翻弄されがちな現代における「早道」だと著者はいう。紹介される古典の時代的な幅はもちろん、哲学からリーダー論、学問論、生きる知恵に至るまでテーマは多岐に亘るが、どの項をとっても著者の内容把握とその表現は的確簡潔を極めており（雑誌の連載の書籍化であるから当然のことではあるが）、高校生活の間はもちろん、大学入学までの間にでも、一読を薦められる書である。

⑥ 基礎数学力トレーニング Nの数学 根上生也・中本敦浩 著

どんなスポーツを楽しむにも「基礎体力」を鍛えておかねばならないのと同じで、数学を楽しむためには「基礎数学力」を鍛えておく必要があります。この「基礎数学力」とは、計算が得意とかそういうものではなく、“見てそれとわかる能力”のことです。たとえば問題、“2014 チームがトーナメント方式で試合をしていったとき、優勝チームが決まるまでに何試合行われるのでしょうか？”どのようにして解きますか？実際にトーナメント表をかいたり、一生懸命計算したりして答えにたどりつく、これも大切なことです。しかし、一歩引いて考えましょう。1 試合で負けるのは 1 チーム、

負け無しなのは優勝チーム、ということは…？瞬殺でしょ？これが基礎数学力です。難しい問題を解きすぎて逆に頭がかたくなっていませんか？見てそれとわかることを見逃してしまっていないですか？この本を読めば、きっとあなたの中に眠ってしまった基礎数学力も目を覚ますことでしょう。数学が好きな人にもそうでない人にもお勧めの一冊です。ぜひ読んでみてはいかがでしょうか？

⑦ 単純な脳、複雑な「私」 池谷裕二 著 (491 / 17 / 2)

私は高校生の時、脳に興味を持ち始め様々な種類の本を読みました。そのうちの本校にもある本を一冊紹介しようと思います。それは“単純な脳、複雑な「私」”です。難しくて分からないという内容はほとんどなく、だれでもわかりやすくかつ入り込みやすい内容がのっています。例えば、理系の人は人差し指より薬指が長いとよく言いますよね？統計的にもそうらしいんです。しかしこの人差し指が短いということは、理系に多い訳じゃなくて男性に多い傾向だそうです。理系っていうのは男性の割合が大きいんですよね、つまり男性の割合が多い理系はいつしか人差し指が短いというふうに言われるようになった。といったことも書いています。

著者は研究者ですが、難しい専門用語を並べずにこの本を書き上げています。脳についての知識・雑学がいつの間にか入ってくるこの“単純な脳、複雑な「私」”をまだ読んでことがない人は、もし興味を持ったのなら、ぜひ読んでみてください。

⑧ 箱庭図書館 乙一 著 (913 / 02 / 2)

今回、箱庭図書館を紹介しますが、この作者である乙一さんの本を、私は友達にあまりお勧めしません。もちろんよい話をたくさん書いていらっしゃるんですが、グロテスクなお話や怖いお話を書くことが多い作家さんだからです。乙一さんはグロテスクなお話、怖いお話の表現に手加減しません。本当に気分が悪くなってしまいそうな表現がありますので乙一さんのお話を読むときは注意が必要です。

この箱庭図書館はそういった注意がいらない作品です。乙一さんのお話は必ず、人間としての本質について考えさせてくれます。乙一さんの作品では、どの作品にもない視点からお話が始まります。その視点から見ると人間は面白く、残酷で、滑稽なんだなと思えるのです。そういった乙一さんらしさが出ているのがこの短編集です。一編、一遍が全く違ったお話ですが、少しだけ繋がっています。そのつながっているところを見つけることができるととても楽しくなりますよ。